

もくじ
 千住掃部宿の「旧書留」から⑦ 1P 関屋天満宮移転について 3P
 コスプレイベントと刀剣の臨時展示 4P

足立史談

第592号

2017年6月15日

足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内

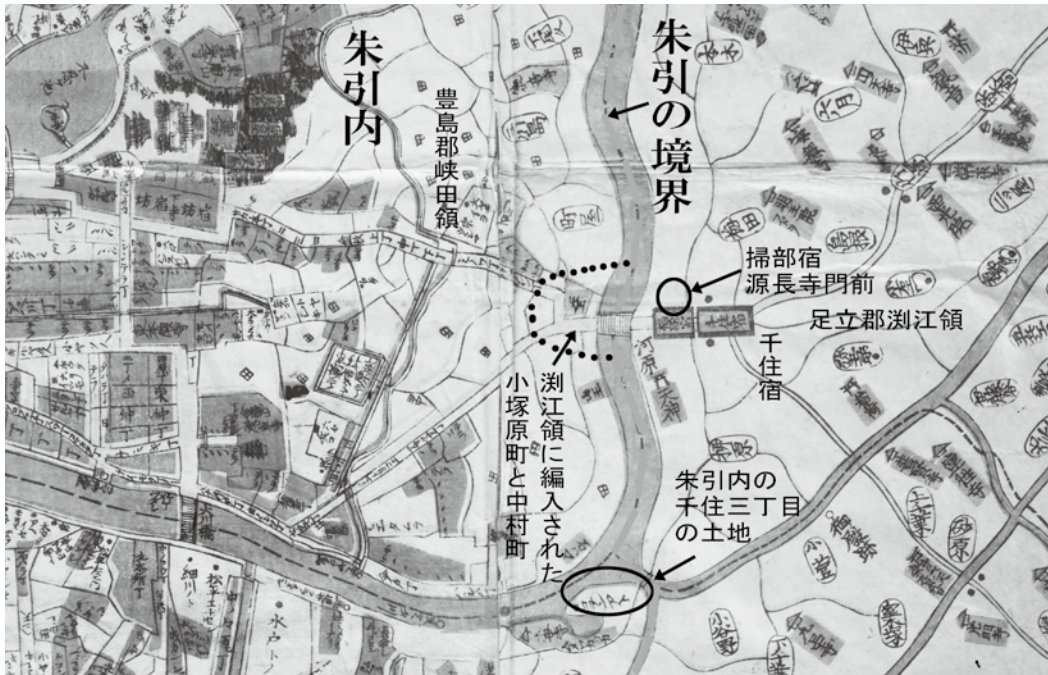
〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(29-308)



江戸と千住の支配関係図 図は右が北、左が南。中央上部から左に逆し字に流れるのが現隅田川。掃部宿源長寺門前が町奉行支配地。江戸近傍図（弘化2・1845年。当館蔵）に加筆

千住掃部宿の「旧書留」から⑦

町奉行支配下の千住

—「江戸」と外の境界にある「町」の事例—

多田文夫

「江戸北郊千住のほitori」とは文人、大田南畝の「後水鳥記」（文化十二・二八一五年）冒頭の一節である。千住が「江戸北郊」と意識されていたことを物語る。読み進んだ千住掃部宿の開発人家であり千住宿の重役だった石出掃部介家（現当主、石出通治氏）「旧書留」（当館蔵）に

千住掃部宿の一部が寺社奉行、町奉行、代官と支配が変遷したことを示す記述が見出された。極論すると千住が江戸だった時代があったのである。そこで近年明らかになりつつある千住の江戸文化を理解する上でも関連資料を紹介しつつ江戸後期の千住の社会を見直したい。

■千住宿全体は澁江領 足立郡澁江領は現足立区的大部分を占める近世の領名である。千住宿も千住一から五丁目、掃部宿、河原町、橋戸町は荒川北岸で澁江領である。いっぽう南岸の小塚原町と中村町（現南千住）は元もと豊島郡澁田領だったが万治元（一六五八）年に千住宿に組み入れられると同時に澁江領に属し代官支配地となった（『新修荒川区史』上）。

■朱引の境界 ところで「江戸」の範囲は御府内についてだが、幕府自身

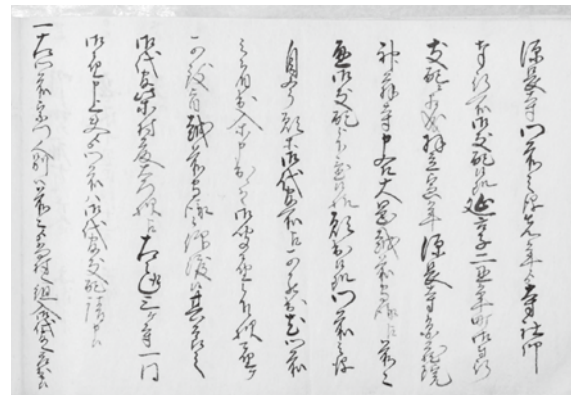
も確定しておらず文政元（一八一八）年に至り評定所で絵図に朱引を引いた範囲、いわゆる朱引内が江戸の府内との見解が示された。ここで朱引内は江戸、御府内というイメージが定着する※1。この時、千住宿は荒川（現隅田川）を境界に小塚原町と中村町が江戸府内、北岸が府外となった。

■町奉行支配の千住 いま朱引内（御府内）という地域イメージが固定されているが、それ以前は様々な定義があり特に町奉行支配地は江戸の町という定義は第一義的であった。これに関連して石出家の「旧書留」には次の記述が登場する。

■積文 （次ページ写真参照）

（13丁裏） ※傍線は筆写

源長寺門前之儀、先年より寺社御奉行所御支配候処、延享二丑年、町御奉行支配二相成、翌寅年、源長寺・圓藏院、神護寺申合、大岡越前守様江前々通御支配被下置候様願出候様、門前之儀、自今願等御代官所江可罷出、尤門前之者出入等申出二候ハ、御聞届被下候様、届ケ可致旨、越前守様被仰渡候、其節之御代官柴村藤右衛門様江、右之趣三ヶ寺一同御届申上、夫より門前八御代官請申候、一、右門前宗門人別八前々より当村へ組入御代官へ差出申候、これによると源長寺門前の千住掃



町奉行支配の記述部分

部宿の一部は次の経過をたどったと記録している。

【千住掃部宿・源長寺門前】

① (従来) 寺社奉行が支配

② 延享二・一七四五年 町奉行支配

③ 延享三・一七四六年 代官支配

記述では元もと源長寺門前は寺社奉行支配であった。しかし延享二年に町奉行支配、翌年には代官支配となった。この延享二・三年前後の各奉行と代官は次の通りである。

・寺社奉行 大岡越前守忠相

・町奉行 能勢肥後守頼一(北町)

島長門守祥正(南町)

・代官 柴村藤右衛門盛喬

忠相は町奉行の「大岡越前」として有名だが元文元(一七三六)年に寺社奉行となり亡くなる直前の寛延四(一七五二)年まで勤めている。

さて、この管轄替について源長寺と小塚原の円蔵院、神護寺(現素盞雄神社)が相談し従前の通り寺社奉行支配を大岡に願ひ出た。だが忠相は「出入」(訴訟等)事務を除いて代官の担当区域とし代官柴村盛喬に支配を変更したと経過も記している。

■江戸の拡大

千住の町奉行支配の背景を確認しよう。江戸は人口の増加で町方が拡大した。正徳三(一七二三)年、享保十七(一七三二)年にかけて周辺地域を代官支配地から町奉行支配地に組み込む管轄替えがづいていた。延享年間(延享元・一七四四年、延享五・一七四八年)は寺社門前町を町奉行支配に大規模に変更、江戸時代最大の増加数である七四五の町が新たに江戸となり一六八七町となった(「寺社領古門前町家」典拠※2ほか)。延享二年の千住掃部宿の町奉行支配への移管もその一環と捉えるのが妥当だろう。少なくとも管轄替を協議した寺社奉行と町奉行は、江戸の町奉行支配化におくことを妥当と考えていたろう。

■「江戸千住」と「町人」

ここで冒頭の「後水鳥記」のほかに、当時の千住の社会が、どのように江戸や自分たちの地域を認識していたのかを示す事例を掲げておきたい。一つは享和三(一八〇三)年の打敷の裏書である。

《打敷 鷹狩模様小袖》 銘文

享和三亥七月十一日

晴譽照風信士 新兵衛

文政九丙戌霜月十一日

江戸千住駅 坂河屋 理右衛門 斎次「一」

(国立歴史民俗博物館蔵)

打敷は青い縮緬地に鹿の子織りの上質かつ豪華な仕立てである。詠えたのは坂河屋理右衛門こと千寿鯉隠と斎次(後半欠落)とある。鯉隠は千住河原町の青物問屋で文人だったことが知られている。鯉隠の意識に「江戸千住」という枠組みがあったことの証左である(典拠※3)。

もう一つは当時の千住宿の人びとが自らを「町人」と意識したと思しいことである。「宗門人別帳」や「伝馬割図」などの公的帳簿類では「百姓」身分であるが、享保三(一七一八)年の代官宛差上(「旧書留」に記載。次回以降掲載予定)では「百姓町人」と記している。「江戸千住」と「百姓町人」は江戸で有りつつ府外、百姓で有りつつ町人という二重の意識があったことの証左である。

■流通の一体化

今回、紹介した資料でも「出入」(争論)については寺社奉行が引き続き担当するとして、争論でもっとも大きいのは江戸の流通で千住市場が成長し、市中の諸問屋としばしば争ったことである。例えば青物問屋が扱う慈姑の江

戸城御用の例では争論の末に文政二(二八一九)年に、神田市場五ヶ月、千住市場五ヶ月、駒込市場二ヶ月の比率に定めている※5。川魚も同じく江戸市中の川魚問屋をしのぐ千住の川魚問屋と川魚仲間の活動が確認でき江戸市中の問屋と議定が結ばれた※6。諸問屋の争論を見ると江戸時代後期には江戸と実質的に結ばれている様子が見えてくる。

私たちは「江戸」を朱引の外にある千住は府外と捉えがちである。しかし文化や社会からは千住が江戸の一部であり府外であると捉えるべき事例が多く見出される。

最後に千住に江戸の朱引内(御府内)に入った土地があったことを紹介しよう。千住三丁目の飛び地だったところで、名所、閑屋の里の一部でもあった(現墨田区堤通二丁目隅田川沿岸部付近)。これも千住が江戸であり府外という境界に位置した事例である(前頁掲載図参照)。加えて民俗学研究でも江戸と深く関連する「町鳶」が社会組織として機能したことを明らかにした論考も登場しており※7、江戸絵画での琳派絵師や谷一門との深い交流の検証と合わせて考えると千住が江戸と郊外の境界領域に立地し、「江戸千住」と表現される社会だったと考える。

【注】

※1 東京都公文書館のホームページ

や『江戸東京学事典』を参照されたい。①町奉行支配地、②寺社勸化場、③江戸払範囲、④迷子札などの掲出範囲の四要素が江戸という定説が記されている。

※2 佐久間長敬「江戸町奉行事跡問答」(南和男校注本、人物往来社、昭和四二・一九六七年による)。

※3 『染と織の肖像―日本と韓国・守り伝えられた染織品』(国立歴史民俗博物館、平成二二(二〇〇八)年)。本資料については同館で原品熟覧の機会を得た。記して感謝申し上げます。

※4 いずれも『大千住展』(平成二五年、当館開催)での公開資料。同展覧会の図録に収載。

※5 吉田伸之『成熟する江戸』日本の歴史第十七巻(講談社、平成十四・二〇〇二年)

※6 川魚問屋と川魚仲間も江戸市中の川魚問屋をしのぎ江戸城御用や市中売りに拡大し、安政四(一八五七)年には町奉行を介して議定の取り結びにいたる。このことについては別稿を用意したい。

※7 内山大介「町鳶をめぐる政策と民俗―東京・千住の鳶頭と地域社会の近現代―」(『日本民俗学』第二八六号、平成二八年)

(当館学芸員)

関屋天満宮の遷座祭から 関屋天満宮移転について 荻原 ちとせ

前号で掲載した千住仲町氷川神社(千住仲町四八―二)境内に祀られている関屋天満宮について、「関屋の里」から移転されたものだと判明しているが、その年代と理由について不明であることを述べた。

今回は、個人HPである「神社と古事記」のなかの「江戸二十五天神とは?」・「東京天満宮二十五社とは?」(<http://www.bucyake-kojiki.com/archives/1041215800.html>・<http://www.bucyake-kojiki.com/archives/104117323.html> 五月一九日閲覧)を見る機会を得て、関屋天満宮が移転した理由が考えられたので、その可能性を示す。

■天神信仰 天神信仰とは、菅公とよばれる菅原道真公を雷神・学問の神として信仰するものである。道真は、平安時代の貴族で重臣であったが讒訴によって大宰府に左遷され、延喜三年(九〇三)二月二五日に現地で没した。その怨霊を慰めるために御霊として祀ったものが天神社・天満宮である。神社数は八幡、伊勢に続いて全国三番目に多い。

■「江戸二十五天神」研究 先に紹介したHPは、江戸時代には、天神・天満宮の巡拝が盛んになり、いつし

か「江戸二十五天神」と称され、現在よく使われる言葉になっていくが、実は根拠となる文献資料はないとして、それを探るものである。HPの筆者は、『風俗画報』臨時増刊第二五〇号「明治三五年(一九〇二)「菅原大神千年祭図会」にある、二十五社参拝は古くから京都にあり、菅公没後九百年を迎えた享和二年(一八〇三)に当たって江戸で始まるようになったものと想像するとの記述を紹介している。この第二五〇号に掲載されている「東京天満宮二十五社」は、菅公御忌九百年から千年の百年の間に練り上げられた「江戸二十五天神」の最終形態であるということも述べている。

■天神巡拝を記した文献 天神信仰を説明し、代表的な天神社の一覧を紹介する江戸期の版本が挙げられているがこの版本の記述年、発行年を見ると、まさに菅公九百年祭で盛り上がった享和二年(一八〇三)と、千住仲町

天神社紹介の版本と関連事項

代表天神社の名称および事項	年代	版本名	記述内容
菅公九百年祭	享和2年(1803年)	—	—
関屋天満宮碑の記年	文化4年(1807年)	—	—
「東都二十五天神」*	文化6年(1809年)	『卯花園漫録』	25社
「東都御府内天満宮諸社」	文化14年(1817年)	『菅丞相往来』	20社
宮殿の記年	文政3年(1820年)	—	—
「御内府及び御内府近辺二十五天神」*	文政3年(1820年)	『天満宮御伝記略』 嘉永4年(1851)	「千住掃部宿関屋」
「東都七天神」	文政6年(1823年)	『菅神御一代文章』 (天神御一代往来)	「芦屋天神 千住大橋向」

* は原典を確認した資料 他は上記HPより内容を引用

氷川神社の石碑、関屋天満宮碑（文化四年・一八〇七）、関屋天満宮の宮殿（文政三年・一八二〇）の年代とが同時期になっていることがわかる。（前号表参照）

■**関屋天満宮の移転** 菅公九百年祭は、江戸での天神信仰を再構築する機会となったことは、版本類の発刊や先に挙げた『風俗画報』からもよくうかがえる。

前号で述べた通り、「掃部宿明細帳」寛政十一年（一七九九）では、未移転であり、「遊歴雜記」文化十一年（一八一四）には、千住仲町氷川神社の神楽殿に続いているという記述が見え、移転は終了していることがわかる。こうした資料等から、関屋天満宮の移転は、菅公九百年祭を迎えるのに触発され、地域の天神社を見直し、再構築を目的とする神社や氏子の動きによって行われたことではないかと想像するのである。

「関屋の里」という故地ではあるが、集落から離れた場所である。千住仲町氷川神社境内に当時祀られていた天神と合祀することによって、地元の天神社を強力にすることを考えたのではないかと思う。もちろん、各地からの参拝者を呼び込むという期待もあったことが考えられる。

まだまだ、多くの資料にあたる必要があるが、仮説としたい。

(正館学芸員)

コスプレイベントと刀剣の臨時展示について

奥村 麻由美

『刀剣乱舞』というゲームをご存知だろうか。実際に存在する名刀（現在は消失した物も含む）をイケメンに擬人化し、レベルを上げて歴史を改変しようとする敵と戦う：というものである。内容はさておき、このゲームが若い女性層を中心に爆発的ヒットしたおかげで、世にいう「刀剣女子」とやらのブームが起きた。

この流行に乗り、徳川ミュージアムや京都国立博物館などの博物館、千代田区、丸亀市、結城市などの自治体、果ては著名な神社など、多くの歴史施設や自治体がゲームとコラボしており、ムーブメントの規模の大きさを物語る。そうして博物館や美術館が日本刀を展示したところ、およそ普段は博物館に興味の薄そうな若年層が見学に押し寄せたというのだから、馬鹿に出来ないものである。

さて、当館庭園に付随する臨測亭の貸出には、その『刀剣乱舞』等のコスプレイヤーの撮影利用が多い。和風な世界観と合致するのだから、施設の利用率が上がるのは悪いことではない。そこで、もっと新たな来館者層を増やす試みとして、5月28日に普段は撮影が出来ない庭園全体や、博物館内での撮影も可能としたコスプレイベントを開催した。当日は多くのコスプレイヤーの方が来館してくださり、イベントは好評であった。

そして今回のイベントに合わせ、当館所蔵の刀剣を四振、臨時展示をすることにした。そのうちの二振りを紹介する。

■脇差 無銘 加州住藤原友重

刀身の錆の状態が酷く、刃紋もほとんど見えないため真贋の判定も困難である。鞘、小柄、象嵌などは一揃いで残り、後世に設えられた可能性が高いが、小柄に「加州住藤原友重」の文字が残る。この銘を元にすれば、「加州住藤原友重」の銘を用いたのは藤嶋（原）友重の七代目、もしくは八代目の作刀ということになり、天正（元和）（一五七三〜一六一五）の戦国末から江戸初期頃と推定される。加州藤島友重は加賀の名刀工の一門で、初代の友重（応永頃、一三九四〜）から、幕末頃まで続き、新選組の松原忠司が池田屋事件に際して差していたのもこの友重刀だと言われる。

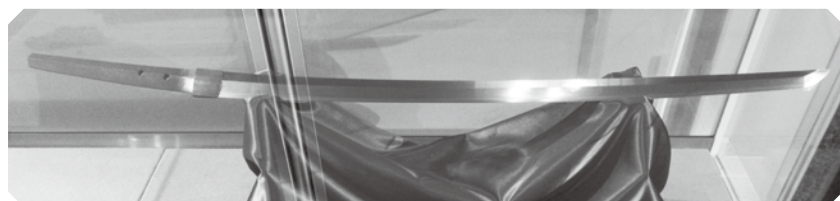
(当館専門員)

■**刀 銘 肥前國忠吉**（天明・寛政年間 一七八一〜一八〇一）
肥前刀でも特に著名なのがこの忠吉刀だが、刀身に肥前刀特有の太刀銘を刻んでいる。銘の切り方から見て六代目忠吉だと推定した。反りの少ない大ぶりな一振である。

今回展示した刀剣については未だ推定であり、この二振を含め、この機会に当館の刀剣類も調査を進めたい。

他の展示施設等でも言えることだが、切り口はどなか出展する機会のない資料を展示し、それをきっかけに興味を持つ見学者がいるのは良いことである。これを機に、郷土博物館にも新たな来館者層が増えることを期待する。

刀剣の臨時展示は、くん蒸休館前（6月18日）まで行います。



【肥前刀の特徴である太刀銘のため、銘が見えるよう刃を下に展示した】